

26. からうす

玄米について糠（ぬか）を取り去り白米にする精米作業は、昔は足踏みのカラウスを使った。暗い土間にカラウスがあり、肥料のホシカ（干鰯）も踏んだ。

お米を踏む

A は「摂津国各郡農具略図」の島下郡のカラウス（碓）。とまり木に腕をかけ片足をシーソー板にのせて踏むと杵が上がり、力を抜くと重さで落下して米をつく。

学校の頃「お米ふまな学校へやらへんで」と言われてカラウスを朝に踏んだ（別府）。東大阪市辺りでは米屋で精米してもらうことを未だに「米を踏んでもらう」と言う。

米屋でも使う

4 代前が明治の初めに米屋と綿屋をはじめて儲けたという三島の K 家の蔵には、かつてカラウスとヌカトオミ（糠唐箕）があった。米をカラウスで踏んで大阪に売っていた。

D と E は庭に置かれたカラウスの臼と軸受けの石。大阪の農家では土間をつぶして応接間を作るケースが多いが、そんな機会にカラウスやヘッツイは取り払われた。

麦もホシカも踏む

大麦は水を加えてカラウスで踏むと皮が取れた（千里丘東）。

ドンゴロスに入ったホシカ（干鰯）を 3～4 本買って、カラウスで踏んで暑い時に干した。コー（粉）は夏の米の肥えに田にやった。固まりは冬作の肥えにした（三島）。

カラウスはいつから？

奈良時代の法隆寺には政屋（まんどころや＝事務所）、厨（くりや＝調理室）、竈屋（かまどや＝湯わかし部屋）、稲屋（稲の収納部屋）と並んで碓屋（からうすや）という建物があった。20.4m×7.2m という広さからすれば、碓屋には何台ものカラウスが並んでいたのであろう（法隆寺資財帳）。

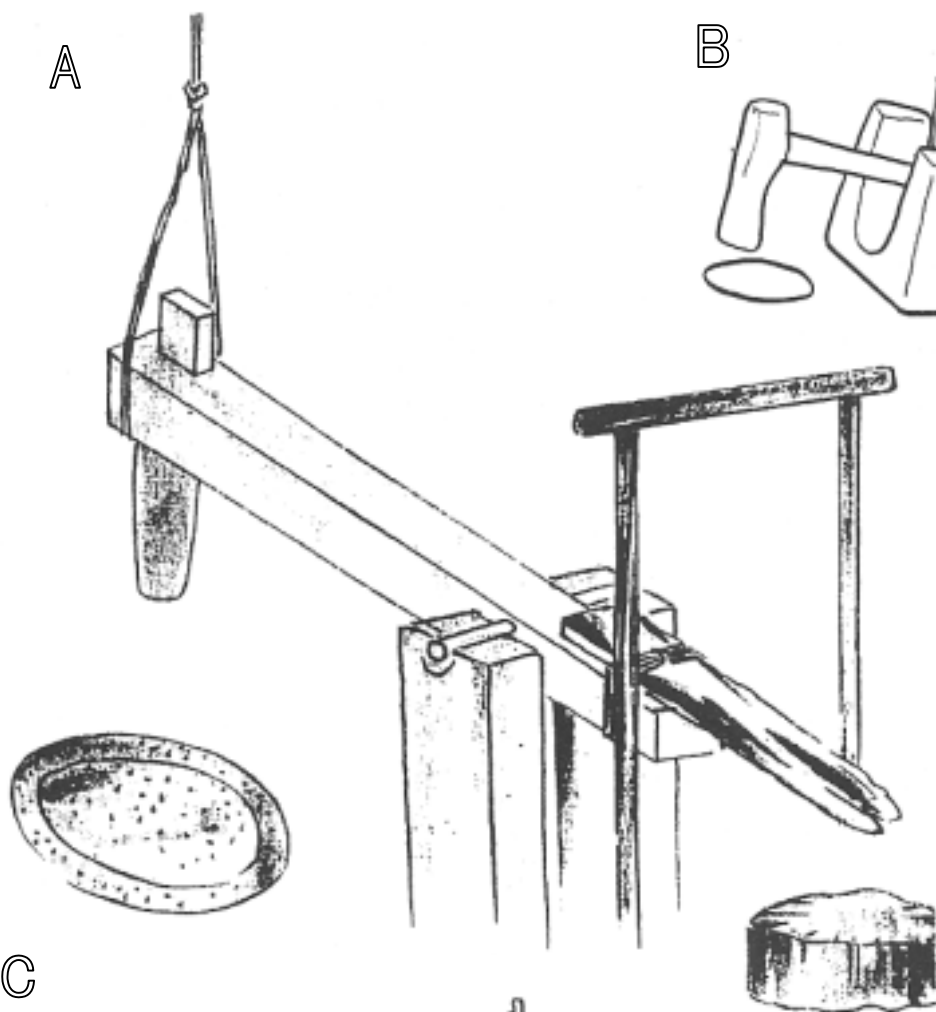
また説話なので信頼度が問題だが、欽明天皇のころ美濃国（岐阜県）の農家に碓屋があり稲舂女（いなつきめ）がカラウスを踏んでいたという話もある（『日本霊異記』）。

カラウスはどこから？

碓（ツイ、タイ）という漢字をカラウスと読んだのは「唐臼」の意味であろう。カラは朝鮮半島の伽羅の国が語源といわれ、朝鮮伝来のものにもカラ〇〇と名づけるが、奈良時代以降ではおもに中国系のものをさした。ではカラウスは中国系か朝鮮系か。

B は北中国の前漢の墓から出土した模型。C は朝鮮半島の民具で踏み板が Y 字形で 2 人踏みタイプである。日本のカラウスの踏板は 1 本なので中国系であろう。

A

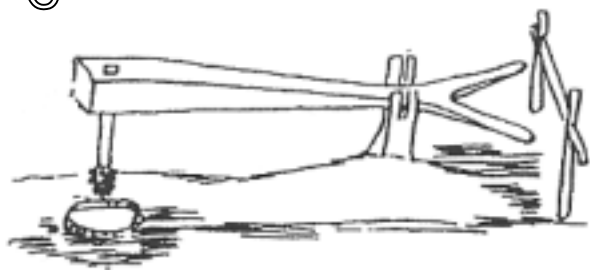


B



碓
代價
壹千八百圓
上等六圓

C



E



D

